

2016（平成28）年度 東京大学 入試問題 第1問 解答例

一 自説に固執せず、他者の説をまずは静聴し、直感的な納得の有無によって当面その真理性の判定に代用することの可能な人。

- * この設問は比喩表現「身体反応」をいかに適切に換言説明できるかにポイントがある。たとえば具体例の一つ「腑に落ちたか」という身体的表現は、「合点がいったか」といった心的内容を意味しているのであり、「内臓（腑）的な実感があったか」などでよいはずはない。したがって、「身体」の語が残っているような答えは当然不可である。
- * 「さしあたり」「代えることができる」も、きちんと解答表現に反映すること。

二 反知性主義者は、いかなる理非の判断も、自身の属人的な資質や能力と知識や情報のみで行い得ると考えてしまうということ。

- * 傍線部イ「～正解をすでに知っている」の直後の文で、もう一度繰り返し「正解を知っている以上、」と前提してから、その帰結として「彼らはことの理非の判断を私に委ねる気がない」と続けている。したがって、「正解をすでに知っている」とはどういうことか、という設問の解答にその帰結内容まで含めてはならない。「理非の判断を私（他人）に委ねる気がない＝他者の判断を参照しない」と解答に書いてはならないのである。

三 所属集団内での理非の判定に、自己の考えや判断が関与しないと言われるのは、自己の知的存在意義の否定に当たるということ。

- * 問一と同様、ここでも「生きている理由がない」という比喩表現の適切な置換が求められる。「死んでもよいと言われている」「生きる気力を衰えさせられる」といった解答は、比喩を理解していないか、少なくとも同系統の比喩表現に置換しているだけで、「説明」したことにはならない。もちろん「文字通り、生きる力を奪われるのだ」とも言うるかもしれないが、その「生きる（力）」の内容は、当然筋力や代謝能などの生理的、肉体的な力ではない。筆者自身が最終段落で「その人（反知性主義者）がいるせいで周囲から笑いが消え、～ようなことは～きわめてヒンパンに起こっている」と述べている。「頻繁に」日本で生命の危機や死の宣告があるという意味ではない。本文における「生きている理由」とは、「所属する集団」の中で、自分が存在する意義をもつこと、それを生き活きと感ぜられること（勤労意欲、創意工夫の提案などができること）を意味し、それを筆者は「集団全体の知的パフォーマンス」の「活性（化）」と述べているのである。

四 人間集団が情報を収集し、様々な検討を経て合意形成に至る活動の全過程で、周囲の他者の知性を活性化する影響を及ぼす力。

*指示語「その（力動的プロセス全体を～）」の指示対象は「人間は～合意形成を行う」であり、解答欄に対して字数が多すぎる。こういうケースで、以下の3通りが考えうる対処である。①なんとか詰めて全体を縮小して書く、②全体を本文中の表現もしくは自前の表現で簡潔にまとめる、③カットする（書かない）。ここでは、①は無理があり、③では説明にならないので、②を採用する。

五 知性的な人物は、知を自己刷新しつつ集団全体の知性を活性化し、反知性主義者は、知性を個人の属性である資質や能力とみなして所属集団全体の知的パフォーマンスを下げる。日本においても、この差に依拠した知性的か反知性的かの人間評価は正しいということ。（一二〇字）

*東大現代文では、まれに「～言おうとしているか」「述べよ」といった設問要求があるときがある。そのときは、それとして設問要求に応じた解答を書かねばならない。逆に言えば、例年通りに「どういうことか、本文全体の趣旨を踏まえた上で～説明せよ」という設問要求であれば、これもまたそれに応じた答案でなければならないのは言うまでもないであろう。東大自身が出題意図として広報している通り、「**論旨を正確に捉える読解力と、簡潔に記述する表現力**」「**ある程度の長さで文章を書く能力**」を測っているのであって、恣意的に筆者の感情などを「忖度」して決めつけ、読書感想文や作文のような「我々は～すべきだ」とか「〇〇政治を許さない」といった答案を書くようにと東大が誘導しているわけではないので、軽率な「身体反応」をしないように。

六 a 陳腐 b 怠惰 c 頻繁